

## 武蔵型板碑の終焉と中近世移行期の墓制変化 —多摩川左岸地域を中心に—

### Extinction of building Itabi in terminal middle age —A case study in the east side of the Tama—

相場 峻 (Shun Aiba) 指導：谷川 章雄

中世の石造物である板碑は、地域ごとの様相を持ちながら全国に広く展開していたことが今日までに明らかにされているが、なかでも関東一帯で隆盛をみた武蔵型板碑は高度に規格化され、14世紀を中心に著しい流行をみた。板碑の造立主旨は追善・逆修などの作善が主であるが、14世紀後半以降においては個人の戒名などを銘文中に刻み属人的な性質をもつものが目立つようになり、人骨や蔵骨器を伴う例があることも発掘調査などを通して明らかになった。このため、後期の板碑は葬送墓制の中で近世墓標に連なっていく役割を担っていた可能性が考えられるが、16世紀末には造立が終焉してしまい、時期の上では近世墓標に必ずしも連続しない。本研究では、こうした問題意識から、板碑の造立終焉の原因とその社会経済史的背景について考察を行った。

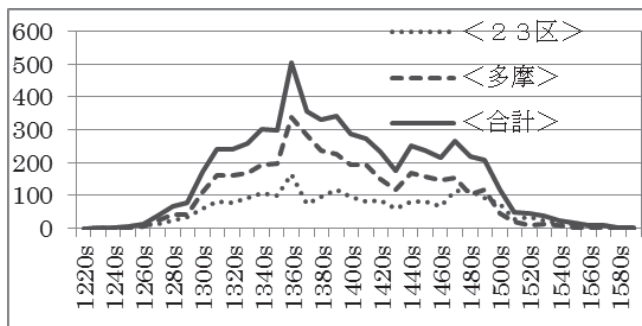
武蔵型板碑の造立終焉の問題を巡ってはこれまでも千々和實氏などが議論しており、信仰の変化や位牌などへの代替、政権による禁止などの原因が考えられてきたが、いずれも十分な説明をなしているとは言い難い。特に終焉に向かっていく過程での物質的側面の変化や造立主体となった人々の変化については、なお再考の必要があるだろう。

東京都内の武蔵型板碑は今日までに12,000基以上が確認されているが、この内で紀年銘の明らかなものを取り出す

と下のグラフのような基数の推移を描く。板碑終焉の画期としては、1430年代に基数が一度底を打ち再増加に転じている時期と、1480年代頃からの急激な減少に向かう時期は特に注目に値する。

これらのことをふまえ、本稿では板碑の造立が最も早くに終焉する多摩川左岸地域の中で狛江市をフィールドとして調査・検討を行った。この中で、紀年銘の遺存している資料を頼りに製作技法および形態を精査してみると、全体として年代を追うごとに製作技法が簡略化し、彫刻についても大型のものが見られなくなることが確認できた。特に、板碑の側面角の鋭角化と背面の押し削りの省略に見られる15世紀の製作技法簡略化の様相は1430年代を境に、はっきりとした変化を読み取ることが出来た。このことから、15世紀以降の板碑は供給者である宗教者や石工の腐心によって、造立を促す対象が下位の社会階層にまで拡大されながら命脈を保ったものと推測できる。

社会史上の画期である中近世移行期の中で戦国時代は、半土半農化した地侍たちの台頭の時期であったことを池上裕子らが指摘しており、板碑も1430年代を境に在地領主から地侍たちへ造立の主体を変化させていったと考えられる。この地侍たちは、勝俣鎮夫が指摘するように、しばしば非武装化されることを嫌い、土地に侵入してきた戦国大名に対して積極的な主従関係を求めて被官化した。戦国権力の伸長を背景として、造立主体となっていた地侍たちが自らの生活や生命を保証するものとして戦国権力との主従関係を選択し、遠方の寺院や漂泊する聖たちを顧みなくなったことによって板碑造立は終焉を迎えたのであろう。そしてこのことによって、中世的な石造物造立を伴う葬送墓制の風習は終焉を迎え、16世紀後半から17世紀にかけてのさかんな寺院の中興・開基と近世墓標の受容の準備段階が生まれたのだと結論付けたい。



【都内板碑の造立基数の推移】